

トランスジェンダー をいきる (11)

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

「男読み読書術」の変容(3) 灰谷健次郎『太陽の子』を読む

1 始めに

高校生のある日、友人のCが、点字の本を読んでいた場面ではっとさせられる。そのことをきっかけに、これまでの読書の変革を迫られ、「点字による男読み」を発見し、灰谷健次郎の長編小説『太陽の子』を読む。そして、「点字による『男読み』」が、後に大学進学や、現在の研究活動へと活かされていることに気づく。

2 点字図書でも「男読み」は可能

Cは、休み時間になると、よく読書をしていた。そんな彼に、私は時々何気なく、「今読んでいる本を、声に出して読んでみてくれる？」と頼んでみた。彼は嫌がることなく、その度ごとに、すぐにその場で声に出して読み始めた。何度かそのようなことを繰り返していたある日、私は彼の点字の読書の仕方に衝撃を受けた。

①「文化的マッチョ」と男性性

最初に衝撃を受けたのは、彼の点字図書との向かい方である。彼は、点字の文字を一つ一つ確認しながら、その確認した文字を単語にするように、まるで1言半句読み落とさない、という正確さを心がけるようにして読んでいた。もし、点字の読み間違いや、読んでいて意味が分からないと判断した場合は、どの辺りから分からなくなったのかを考え、意味が分かるまで何度も何度も読み直していた。最初は、彼のそのような読書の仕方に、辛気臭いような読み方だと思ったのだが、彼が声に出して読書をしているのを繰り返し聞いているうちに、私は、彼と私の間の点字図書との向かい方に、決定的な差異があることに気づいた。

極めて点字による読書が嫌いで、しかも、「点字の読書は男らしくない非行動的行為」とまで思っていた私は、一定の時間内に何ページ読めるかという競争原理に基づいた効率重視の読書で、なんとか学業をやり過ごしていた。だから、そこには当然、どのような内容が書かれているか、などの知的レベルの高い読み方ではなかった。

これに対して、彼の読書の仕方は、点字による文字情報を正確に理解するという1点に集中しているという意味で厳格さを有していた。この厳格さが、「読解力」に結びつき、知的レベルの高い読書の仕方であることを思い知らされた。すなわち、特に点字による読書に対して非行動的で男らしくない、という従来の自己イメージとは別に、点字による文字情報を正確に理解するという彼の1点集中型読書の仕方が「文化的マッちょ」として自己認識され、新たな男性性を発見したような思いであった。確かに点字による読書は、録音による読書と比較して、身体の行動は制限されるものの、知的・心理的行動は録音による読書とは比較にならないほど活発であることに気づかされた。

②「腹式呼吸」で男らしい声を

次に衝撃を受けたのは、読書をしている彼の声の出し方である。話をしているときの彼の声は、さほど低くはないのに、いったん読書モードになると、彼の声は腹に答えるような野太い声に返信してしまうのである。最初は、このような不思議な現象を、どのように理解してよいか分からなかったのだが、保健体育の時間に、「男は腹式呼吸、女は胸式呼吸」と習ったことを思い出した。

何度か彼が読書をしている声を聞いているうちに、私は、読書をしている彼の声の出し方が、「男の基礎的な声の出し方」であると確信した上で、「腹式呼吸で声を出すこと」に徹しようと努めるようになった。そこで、家の中で、片っ端から点字の本を、長時間大声で読んだり、腹筋や背筋などの基礎体力作りに励んだ。もちろん、私の体は「女性」であるから、たとえそのような努力をしても、男のように低い声にはならないのは十分に分かっていた。だが、せめて、腹式呼吸で声を出すことで、男の声の出し方の基礎を身につけたい、というささやかにして切実な願いが、私をそのような行動に駆り立てたのである。

彼のこのような読書の仕方は、改めて尊敬に値した。このことは、今までの自己の点字図書への向かい方の変更を迫られただけではなく、今までの自己の読書の仕方の変革・再構築をも迫られた。そこで、彼のこのような読書方法を「点字による『男読み』」と命名した。

灰谷健次郎『太陽の子』を読む

3、「自己に課せられた通過儀礼」を読み解く

Cのそのような「点字による男読み」を発見した私は、程なくして彼の読書の仕方を実践した。

その実戦舞台になったのが、灰谷健次郎の小説『太陽の子』に登場する、沖縄出身の旧不良少年が、不良から足を洗い、成人男性へと移行していくプロセスを描いた場面である。

①「不良少年」から、「成人男性」へと移行するための通過儀礼

主人公の小学生の女の子の家業である沖縄料亭で、旧不良であった沖縄出身の少年が働いてい

た。彼が不良への道を歩んだ理由は、沖縄出身であるということで、子どものころからあちこちでいじめられていたからであるという。働き始めたころの彼はすさんではいたが、主人公をはじめ、客を含めた沖縄料亭の関係者たちのサポートによって仕事にもなれ、料理の腕前も上げていった。

あるとき、彼が主人公と公園で遊んでいたところを、旧不良仲間絡まれ、仲間に戻るよう説得され、暴行を受けた。仲間たちの暴行に無抵抗であった彼が、そのうちの1人の少年から発せられた「根性ないなあ沖縄は」という一言によって、2人は取っ組み合いになり、重症で病院に搬送された。

そのとき、彼を介抱したのは、長らく彼と離れ離れになっていた母親と、主人公をはじめとする沖縄料亭の関係者たちであった。何度も警察の補導を受けていたのか、警察官を見て暴れる彼の事情聴取を無理やり断行しようとした警察官に対し、沖縄戦の集団自決によって片腕をなくした男が立ち上がり、警察官に抗議した。主人公に当てた自らの思いや、長らく離れ離れになっていた母親の過去をつづった手紙を最後に、彼は不良から足を洗うことになる（灰谷,1978 pp338-388）。

この場面は、当に、不良から成人男性への「通過儀礼」を描いている。さらに、この小説をさかのぼって読んでみると、この通過儀礼の場面に至るまでには、沖縄料亭で働き始めたころのすさんだ彼の周囲に、たくさんの人的資源があったことを忘れてはならない。

ところで灰谷は、この少年を15、6歳と描いている。この時期の男の子であれば、このころから、特に父親との関わりの中で、何らかの形で、少年から成人男性に移行するための「通過儀礼」を経験するだろう。その「通過儀礼」としてなされる儀礼的行為の多くは、父親との身体的・心理的直接対決である。彼の場合は、父親の代わりに、旧不良仲間との身体的・心理的対決と、その行為による周囲からの人的サポートによって、この「通過儀礼」を経験したといえるだろう。すなわち、旧不良仲間からの暴行に対して無抵抗であった彼が、沖縄出身であるという理由で「根性がない」と言われたことへの反撃は、彼が旧不良少年であれば必ずしかなかった旧不良仲間との身体的・心理的対決であり、そのことは、不良少年から成人男性に移行するための「儀礼的行為」を意味している。彼のそのような「儀礼的行為」に対して、長らく離れ離れになっていた彼の母親や、主人公をはじめとする沖縄料亭の関係者のかかわりは、彼が不良少年から成人男性に移行するための「通過儀礼」として乗り切るために、なくてはならなかった人的資源であったろう。

身体は思春期から成人に達しても、心理面では不安定である。その心理的不安定さに対する人的資源の有無によって、この時期を「通過儀礼」として乗りきることができるかどうか勝負の分かれ目であることを痛感させられた場面であった。

②自己に課せられた「通過儀礼」を読み解く

では、翻って当時の私は、どのような立ち位置の時期にいたのか。灰谷の描いた少年と対置させてみると、次のようなことがいえる。

当時の私は、Cの読書の仕方を目の当たりにして、自己のこれまでの読書の仕方への変革・再

構築を迫られたことによって、自己の生のあり方や知的好奇心が大きくなっていった。灰谷が描いていた少年の年齢よりは少し上であった当時の私の年齢は 18、9 歳であっても、これまでの読書の仕方を変革し、再構築することは、私にとって、灰谷の描いていた少年同様、この時期にしなければならなかった「儀礼的行為」という新たな意味性を持っていたことへの気づきを得ることができた。

では、「儀礼的行為」としての意味性を持っていた自己の読書の仕方の変革・再構築に対する周囲からの人的サポートはあったのだろうか。

確かに、親や教師や周囲の大人たちからは、しばしば「本を読みなさい」と言われたことは覚えている。だが、そのほとんどは、「本を読まないで、えらい人になれない」、「あなたは眼が見えなくても、点字や録音図書で本が読めるでしょ？」などの、半ば脅迫的な上から目線でしか、読書の昂揚を進められていなかったもので、「人的サポート」とはいえなかった。そのような意味では、読書の仕方の変革・再構築に対する人的サポートが乏しかった、といわざるを得なかった。

しかし、そのような状況の中、彼の「点字による『男読み』実線」は、たとえ彼から「本を読みなさい」などと言われなくても、無言の内に、自己のこれまでの読書の仕方に警鐘を鳴らしたのである。このことが、唯一、私の読書の仕方の変革・再構築に対する人的サポートであり、その数少ない人的サポートをうまく利用した、ということができただろう。

4 終わりに——点字による「男読み」は、現在の研究活動へ

このように考えてみると、点字による「男読み」の実践は、単なる当時の実践した記憶だけではなく、その記憶がその後の人生においても深く影響している。

そのひとつが、現在、大学院での研究活動である。特に、論文資料を精読する際に、点字による文字情報を正確に読み取り、文意がつかめなくなった、と判断した場合に、もう一度そのつかめなくなった文意のところまで立ち戻ってみる、という読み方は、論文読解に際して重要なことである。

また、点字による「男読み」は、点字による文字情報によって得られた自己理解や自己探求に対して、快楽を喚起し、知的向上心へと発展していくプロセスへと導かれ、このプロセスへの欲求は、際限なく継続することを確信しているのである。